



No.07

## 岩手病院

Interview  
斎藤 久美 / 主任保育士

# さまざま 室内イルミネーション

さまざまな人の思いを叶える



2018年度のイルミネーション。  
保育士たちが交代で担当し、イルミネーションの配置を工夫し、新しいものを買足したりして毎年趣向を凝らしている

病院にいながら、思い思いに光と音の共演を楽しめる空間。岩手県南部にある岩手病院（一関市）では、そんな空間が毎年生まれます。11年目を迎えたこの冬も、イルミネーションで彩られた部屋で過ごす人たちの姿が見られました。

イルミネーションというと屋外のイメージが強いですが、岩手病院のイルミネーションは屋内で実施されています。もともと重症心身障がい児（者）病棟の廊下で患者さん向けに実施されていましたが、入院中の患者さんだけでなく病院を訪れるすべての人の癒しになればと、いろいろな目的に活

用できる広い部屋で、実施されるようになりました。平日の午前10時から午後4時半までの間、この空間で過ごすことができます。

重症心身障がいの患者さんの場合、入院生活が長いことが多く、病室は生活の場でもあります。病室から出る機会を増やして、病院内であっても生活空間を拡大することが、このイルミネーションの目的の一つです。病室では反応が少ない患者さんでもイルミネーションを見ると、よく笑う・目の動きが激しくなる・声を出すといった、明らかな変化が見られるといいます。

また、リハビリテーションで訪れた患者さんにとっては、リハビリテーション後のささやかなご褒美となります。さらに、「もっと傍で見たい」と、自分の力で体を動かすことで、効果的なリハビリテーションにもなっています。

そのほかにも、相部屋の病室を離れてプライベートな時間が欲しいご家族、患者さんと落ち着いて話をしたい病院スタッフなど、訪れる人々の目的はさまざまです。

落ち着いた空間で、同じ景色・時間を共有することは人間関係において大切で、癒し効果だけではなく、そうした空間を提供することが室内イルミネーションの目的だと、斎藤保育士は笑顔で話してくれました。

岩手病院のイルミネーションが11年も続いている背景には、訪れる人々のこうしたさまざまな思いがあり、その思いが少しでも叶う場所だということがあるのでしょう。



### 岩手病院 (岩手県一関市)

許可病床数250床。地域医療と政策（セーフティネット）医療を柱とする拠点病院。特に重症心身障がい児（者）病床は150床を数え、室長・児童指導員・保育士の計9名が療育指導室で重症心身障がい患者さんの生活援助や訓練などを行っている。



毎年恒例の点灯の様子。患者さんをはじめ、看護師や保育士、リハビリスタッフなどさまざまな職種が参加して賑やかに点灯のカウントダウンをする。写真は一昨年（2017年）の様子で、院長がサンタクロースの帽子を被って登場することが恒例となっている



柱に投影された動く雪の結晶。患者さんは結晶を追いかけてようと自ら手を伸ばす



### 患者さんを癒すセラピー用アザラシロボット

センサーと人工知能(AI)により人の呼びかけに反応し、動物を真似た愛らしい行動が人の心を和ませる。認知症患者さんや自閉症の子どもの導入される場合が多いが、岩手病院ではいち早く重症心身障がいの患者さんに導入した。自ら頬ずりしたり、見つめあうだけで笑顔になったりと、明らかな変化が見られるという。安くはないロボットを購入した当時の事務長の苗字にちなんで、「ののちゃん」と名付けられている